

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳
『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション1 東アジア—清帝国，朝鮮，日本—』
古今書院 2015年1月 814頁 20,000円＋税

エリゼ・ルクリュは、19世紀フランスを代表する地理学者であり、無政府主義（アナキズム）の思想家としても知られている。ルクリュは1830年にフランス南西部のジロンド県に生まれ、ベルリン大学でカール・リッター（1779～1859）の講義に接して地理学を志すようになった¹⁾。1851年のルイ・ナポレオンによるクーデターに際してルクリュはイギリスに亡命し、1857年の帰国までの間に南北アメリカなどを旅行した。1871年のパリ＝コミュンに参加したルクリュは国外追放の刑に処せられ、スイスで生活を送るようになる。この時期にルクリュは、彼と同様に地理学者かつ無政府主義者であったロシアのピョートル・クロボトキン（1842～1921）と協力関係にあった²⁾。1890年の帰国後、1894年にはブリュッセルの大学で「比較地理学」の講義を開き、1905年にベルギーでその生涯を閉じた。ルクリュの生涯や業績に関しては日本でも早くから紹介され³⁾、とりわけ無政府主義者の石川三四郎（1876～1956）はルクリュから大きな影響をうけて、その著作の翻訳や伝記的著述にたずさわった⁴⁾。

ルクリュは多作の人であったが、その中で代表作とされるのが、『大地』（全2巻、1868～69年）、『新世界地理』（全19巻、1876～94年）、『地人論』（全6巻、1905～08年）の三部作である。野澤によれば、『新世界地理』の執筆はルクリュのスイス生活中のことであり、前著の『大地』が自然地理学の体系書であったのに対し、自然と人間との相対的な関係性やその歴史性が世界各地でどのように展開しているのかを記述したものである⁵⁾。この目的は、『新世界地理』の副題である「大地と人間」にも示されている。本訳書のリストから原著全19巻の総頁数を試みに算出すれば16,972頁、1巻平均でも900頁弱となり、この浩瀚な、しかも全世界を対象とする書物を、まったくの単著で年に1巻ずつ刊行し続けたという事実には圧倒される。

「訳者あとがき」によれば、フランスの地理学界では約50年ごとに世界地誌を編纂するのが伝統となっている。その最初はコンラート・マルト＝

ブランによる『世界地理提要』（1820～29年）で、それを引き継いだのがこの『新世界地理』である（「新」はそれを意図している）。第3弾がヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュの遺志によって1927～46年にまとめられた後、1990～96年にロジェ・ブリュネ編による第4弾が刊行され、後者については邦訳が朝倉書店から『バラン世界地理大系』として刊行中である。

本書は、1882年に刊行されたルクリュの『新世界地理』第7巻の「東アジア」である。第7巻を最初に翻訳した理由について、訳者はあとがきで三つの理由を列挙している。すなわち、一点目は日本に関する記述がルクリュの「目の確かさ」に対する読者の判断材料になるであろうこと、二点目は原著のスタイルが第4巻以降に確立すること、三点目は先に「難物」の巻を訳しておきたかったこと、である。本書の章構成は下記の通りである（括弧内の頁数は訳書のもの）。

- 第1章 総説（16頁）
- 第2章 チベット（83頁）
- 第3章 中国トルキスタン—タリム盆地—（38頁）
- 第4章 モンゴル（104頁）
- 第5章 中国（377頁）
- 第6章 朝鮮（34頁）
- 第7章 日本（164頁）

野澤は、『新世界地理』の記載にみられる一般的な特徴として、①記載の単位が国家（それをさらに細分化する場合には水系を主とする自然地理的区分）、②自然と人間の関係を運動するものとみる視点、③人文地誌の記載が都市集落中心、という三点をあげている。そして、各章の記述は、対象地の概観や歴史を扱った後、地形などの自然的記載、そして産業などの人文地誌へと進むとしている⁶⁾。以下では、この指摘をふまえながら、本書を通読しながら評者の印象に残った諸点について述べていきたい。

章構成からまず気づくのは、「東アジア」の巻頭に中国ないし日本がおかれるのではなく、当時の清の外縁部にあたる内陸部から記述が始まっている点である。もちろん上に付記したように、頁数としては中国、次いで日本が大きな分量を占めているが、当時のチベットやモンゴルが半独立的

な領域ととらえられていたことがうかがえる。

第1章「総説」では、東アジアの地勢や交通史が略説され、有史以来の中央アジア・インドとの交通や、〈玄奘三蔵の探検〉・〈モンゴル帝国〉・〈ロシアの南進〉といった項⁷⁾が扱われる。続けて、執筆時の同時代的現象であった東洋と西洋の相互交流に筆が及ぶ。そして、「東アジアはもはや開かれた世界の一部である。世界史のなかへ5億人を合併したことによる全人類への結果はどのようなものになるだろうか。これ以上に重大な問題はない。未来文明の発展にかくも大きな役割を果たすであろう東アジアと、その「黄色い」住民の研究は、したがって、最大限に重要なのである」(16頁)と、ヨーロッパからみた東アジアの重要性を強調している。地誌というと、とかく地域を閉鎖的に扱いがちだが、この「総説」の部分だけでも、ルクリュが対象地域と外部世界との交流を十分に意識していたことが看取できる⁸⁾。

ルクリュが本巻を刊行した1882年前後を年表で確認すると、1881年に清とロシアがイリ条約を結び、1884年には清が新疆省を設置した。また、フランスのベトナム保護国化をめぐる清仏戦争(1884～85年)があり、1885年に天津条約が結ばれるなど、西洋列強の各方面からの東アジア進出(侵略)が盛んであった。つまり、西洋と東洋の邂逅がかなり均衡を欠いた形で進んでいた時期である。他方、朝鮮では1882年に壬午軍乱、1884年に甲申政変が起こり、同国をめぐる日清間の対立が露わになりつつあった。日本国内では、1881(明治14)年の政変をうけて国会開設の勅諭が出され、同年には松方財政の実施が開始されるなど、その後の立憲政治・資本主義経済の揺籃期にあった。同時に、1875年の樺太・千島交換条約、1876年の小笠原諸島領有通告、1879年の琉球処分完成により、「日本」の領域が画定されていった時期でもある。

本書中、西洋の進出という時代の趨勢は、まず各章の記述に占める探検家や地図・測量の事績紹介の比重という形で示される。第2章「チベット」を例にとれば、第1節「総説」の中に〈チベットの探検〉(20-22頁)があるほか、第2節「自然」の中でツァンボ(ヤルンツァンボ)川の探検史について詳細に述べられている(46-55頁)。第4章「モンゴル」の第5節「満州」では、松花江(ソン

ホワ川)の遡上記録として、上にあげたクロポトキンの名をあげている(219頁)⁹⁾。第5章「中国」でも、〈ヨーロッパ人による中国紀行〉・〈最近の調査〉などで西洋人の活動にふれており(244-246頁)、第7章「日本」では、〈西洋側の日本認識〉・〈日本人による地理研究〉といった項で間宮海峡の「発見」などを記している。その中では、「すでに日本の一般図はアルバニアやマケドニア、スペインの一部など、多くのヨーロッパ国家よりも精密な輪郭をそなえ」、「旅程や観光地を記したさまざまな縮尺の案内図、すなわち名所図会は西洋諸国よりもはるかに普及している」(652-655頁)と状況が活写されている。そして、第6章「朝鮮」の〈沿岸測量〉では、「現在、朝鮮沿岸を最も綿密に調査しているのは日本海軍」であり、朝鮮半島南西部の「膨大な水路の大半はすでに日本が測深を終え」(617-620頁)たとしており、地理的知識の拡大が帝国主義に直結していた時代を如実に反映した記述となっている。

こうした時代状況の中にあつて、西洋と東洋を相対化するルクリュの視座は、本書中の随所に見受けられる。中国では、大航海時代以降、「[夷狄]が流血騒ぎを起こさぬ年はない」ようになって「中国人が彼らにつけた呼称を正当化」する中で、「中国が自らを閉ざしたのは、ヨーロッパ人を回避するためだった」(562頁)。アヘン戦争以降については、「二種類の外国人が中国を更正すると言ひ張っている。一方は、自分を愛するように汝の隣人を愛せという。もう一方は、身の危険なしに遠くから隣人を殺害する術を教え、殺人技術の粹である小銃をわれわれに買わせる」という「京報[政府新聞…訳者注]掲載の勅令」を引用したり(286頁)、太平天国の乱で「西洋人は宗教よりも貿易の利害を優先」したと記したり(300頁)して、西洋人の立場の矛盾を指摘している。アヘン貿易については、イギリス政府への非難に理があるとしながらも、「蒸留酒にせよ、煙草にせよ、博打あるいはそれ以外の物質的、精神的な毒薬にせよ、先住民や外国人の悪癖につけこまない国家は皆無である」と、より問題を一般化してとらえている(570頁)。この見解は、広い意味での無政府主義の立場に由来するともいえよう。

もちろんルクリュとて、日本人と外国人の混血児の性質に関する民族別分類を無批判的に引用し

たり(723頁)、大森貝塚とみられる遺跡を「食人種の墓跡」としたり(782頁)するような誤謬がないわけではない。ただ、当時の学問的水準からすれば、第3章「東トルキスタン」の中で、「多様な民族が、商業に引き寄せられたにせよ、戦争で敗走し、あるいは征服者として到来したにせよ、無限に混じり合っ」てきており、「農耕地帯の住民はお互いを区別するさいに民族名にはよらず、出身都市の名前を用いる」(120-121頁)と述べるルクリュは、今なお強い「人種」や「民族」という固定観念の枠を相当に踏み越えていたといえる。さらに第4章中の〈モンゴル人の身体的特徴〉では、あごひげが薄いモンゴル人種の一般的特徴について、「身だしなみの作法の結果をもって、生来の特徴と考えれば誤りになるだろう」と冷静に記し、西洋人の「モンゴル人種」という総称に対し、「中国人がヨーロッパ人をひとからげに「紅毛夷」と呼ぶ」反例を出している(192頁)。

民族の特徴に関する記述を中国と日本で比較すると、〈中国人の長所〉に「作法の礼儀正しさといひ、親切さといひ、中国ほどそれが普遍的な国はない」、〈中国人の短所〉に「個人の率先が弱く」、「まずもって慣習に沿う」をあげ、「これほど軍歌が少なく、技芸と平穩を一貫して讃仰してきた民族はない」としている(288-289頁)。一方、「日本人ほど喜怒哀楽を外に見せぬ人間はいない。恐ろしく控えめで、他人の意見をすこぶる気にするため、言葉の軽重を考えてからでないと発話しない」とその〈気質〉を紹介し、名誉を尊重する「日本民族は、戦わずして征服されることは絶対のない民族のひとつだ」と、中国人と対照的な形でえがかれている。また、「沈着さ、自己の尊厳、名誉の感情、お互いの尊敬と善意において、大衆は明らかに大半の西洋人の道徳水準を上回る。自然の美に対する理解も同様であり、しがたない農民でさえ景観の魅力と壮大さに瞠目する」と好意的に記す反面、「滑稽なほどヨーロッパ人を真似ようとする馬鹿げた振る舞いを捨て、厚化粧で英語を話すのを止め、模倣者としてではなく、対等な者として、独自のやり方で自らの発展に努めるなら、それに越した事はない」(726-729頁)と、21世紀まで見通していたかのような炯眼ぶりを示している。

評者が関心を有する宗教面での記載をみると、

まずチベットを扱う第2章で、チベット仏教やボン教の説明に多くの頁を費やし、典礼や施設面でのカトリックとの類似性を指摘している(71-80頁)。中国に関しても、「同一人物が仏教徒であり、かつ老荘の徒であり、孔子の教えに従う」と、「三教はひとつ」という信仰のありようを把握し、「しばしば嬰兒を抱いた姿に表現される観音の図像が「聖母マリア崇拜のそれと完璧に相似する」と述べる(263-277頁)など、単に異教と片づけるのではなく、キリスト教と対比させながら理解しようとする姿勢が目立つ。朝鮮の〈在来信仰〉では、「知識人は中国の士太夫を模倣し、孔子の合理主義を信奉する」一方で、「仏教行事はほぼ完全に無視されて」いるとあり(635頁)、日本の〈信仰〉では、「教育を受けた者だけでなく、都市の最も貧しい住民でさえ、自国や海外を起源とする種々の宗教に対し、全面的な無関心を見せるか、あるいは無関心を装う」(731頁)と今に通じるような記述がある。その後、〈神道〉・〈儒教と仏教〉・〈キリスト教〉と続き、そのうちキリスト教に関して、「港町に上陸する胡散臭い連中を目にする日本人は、相手の宗教を尊重する気にはまったくならない」と刊行当時の状況を記している(732-738頁)。

もう少し日本関連の叙述を拾うと、東京の説明の中で、「かつて政治生活は大名とその家臣に限定され、住民は締め出されていたため、日本の都市には人々が集まる場所というものが一切なかった。市民というものが皆無ならば、公共広場は無用だからである」と、ジョルジュ・ブスケ(1846~1937)の『日本見聞記』に従って述べている。〈司法〉については、「西洋にくらべると、日本の牢屋はほとんど空っぽといって」よく、「フランス人法律顧問たちが作成した民法と刑法は、1880年に施行〔実際には公布…評者注〕されたが、刺青の習慣や、人目をばばかりぬ入浴といった、日本人にとってまったく非難されるべきものではなかった行為を違法とすることで、彼らの正義の観念に動揺を引き起こす結果になるのではないかと懸念される」(802-803頁)と、西洋的規律を相対化している。また、〈蝦夷〉や〈アイヌ人〉に頁を割り、〈和人との関係〉で「追い追い北方に駆逐され」、「常にだまされている」と述べたり(708-715頁)、〈小笠原諸島の発見史〉や位置・自然・

住民について解説したり(773-776頁)と、「日本」の版図に入って間もない地域にも目を配っている。ちなみに、石川三四郎は渡欧時に読んだ本巻の原書について、「ふつつかな貧しい語学力を以て「日本の部」を読んだ時、私は始めて日本という国を知ったように感じた」と述懐している¹⁰⁾。

このほか、上述のルクリュ三部作に通底する主題ともいえる自然と人間の相互関係については、例えば中国北直隸省(現、河北省)における(水害の原因)について、「ヨーロッパや新世界の多くの国々とおなじく、水源になる山肌の伐採だ」と述べ、「森林伐採はまた「埃の風」を意味する「禍風(クワ・フン)」の猛威を増加させる結果ももたらした」と続けている(306-307頁)。ほかにも、中国地誌の定番である秦嶺(チンリン)山脈(および伏牛(フーニウ)山脈)による南北区分、すなわち「南側の耕作者は長雨を恐れるが、北側の大きな心配事は旱魃」であって、南北で農作物が異なることもおさえている(353-354頁)。日本の気候に関しては、「一年のうちに風向が逆転するため、日本の四季は温暖な西ヨーロッパよりもはるかに規則正しい」ため、「季節と気温をあらたまった言い方で述べるさまざまな表現が日本語に導入された」(698頁)と、人間の環境として自然をとらえる視点がみとれる。

さらに将来への見通しという点でも、ルクリュの筆は冴えをみせている。第4章中の〈モンゴル人の変容〉では、「もしロシアが望めば、こうした北モンゴル人の反漢感情を利用するのは容易と思われる」(203頁)と、後のモンゴル独立(1924年)に至る情勢を認識し、日本でも1942年の関門海底トンネルの開通を予言する(768頁)など、彼の「目の確かさ」を感じさせる記述が各所にある。〈中国人の海外移住〉では、図表を用いつつ、クーリー(苦力)輸送の悲惨さやその出自等にふれた後、〈中国社会の形成〉・〈移住先での摩擦〉へと筆を運び、「何をしようが人種間の接触はますます頻繁であり、理想とすることも、性向も、伝統や習俗も違う白色人種と黄色人種が、どう妥協するかという大問題は、膨大な地点で同時に発生している」と結んでいる(576-582頁)。また、本書の末尾近くでは、日本の〈陸軍〉について、「堅軍を誇る日本が、自分よりも弱い諸隣国に対する侵略政策に身を委ねる心配がある」と

警告している(805頁)。

読了して評者が改めて驚かされるのは、東アジアを訪れたことがないはずのルクリュがこれだけのものを書けたという事実である。それが可能であった大きな理由は、前述のように同時期に探検や旅行が盛んに行なわれ(往々にして領土的野心と結びついていたことはいうまでもない)、それらの成果を集積する知のネットワークを参照できた点に求められよう¹¹⁾。本書に収められた多数の地図(162葉、ほかに口絵7葉)や挿画(91点)もこの集積から引き出されたものである。また、「ルクリュのもって生まれた文学的才能」¹²⁾や軸のぶれなさ、全世界的な視野もさることながら、今日よりも世界が多様性に満ちていたことよるところも少なくないように思う¹³⁾。翻って情報過多の現代、そしてグローバル化の進展の中、地誌の記述という点でルクリュの時代がかえって好条件であったと述べるのは、うがち過ぎであろうか。

歴史的な記述に多くの頁が割かれているのも、本書のすぐれた特徴である。ルクリュは、別の著作の中で、「地理は、人と人との間の継続せる反動作用によりて漸次に「歴史」となるべきである」、「時間は空間を絶えず変化する」¹⁴⁾、「歴史学が時間の地理学であるように、地理学は空間の歴史学に他ならない」¹⁵⁾などと述べており、今日フランス地理学の伝統となっている地理学と歴史学の密接な関係の源流をみることができる¹⁶⁾。本書の詳細な記載自体、すでに十分な歴史的価値を有することはむろんである。

最後になるが、このような意義ある大著の翻訳に着手された訳者と、創立100周年記念事業としての刊行を決意された出版元に敬意を表したい。訳者は可能な限り現行地名との照合に務めているほか、労をいとわずルクリュの出典元にあたっており、その誤りを指摘している箇所さえある¹⁷⁾。その丁寧な仕事ぶりに脱帽するとともに、続刊を期待するものである。(なお、2016年1月には「北アフリカ2」の巻が刊行された)

(三木一彦)

〔注〕

- 1) ルクリュの地理学研究におけるリッターの受容については、竹内啓一「比較地誌における

- リッターの方法」一橋論叢86-3, 1981, 93-94頁でふれられている。
- 2) クロポトキンによれば、ルクリュの「アナキズムは、あらゆる風土における人間生活と、文明のあらゆる段階における人間生活についての博大で精細な知識の要約のようなものであった。彼の著書は19世紀のもっともすぐれた書物のなかにはいるが、そのすばらしく美しい文体は人間の精神や良心をゆり動かす力をそなえている」。P.クロポトキン著、高杉一郎訳「ある革命家の思い出」(大内兵衛ほか監修『世界教養全集26』平凡社, 1962), 310頁。
 - 3) 例えば、田中阿歌麻呂「佛國の地理學者エリゼ、ルクリュ先生逝く」地学雑誌17-8, 1905, 579-584頁。
 - 4) それらをまとめたものに、①エリゼ・ルクリュ、石川三四郎『アナキスト地理学—エリゼ・ルクリュの思想と生涯—』書肆心水, 2013, 314頁がある(同書は1-143頁に石川によるルクリュ『地人論』の抄訳(初出1930), 145-314頁に石川によるルクリュ伝(初出1948)を収める)。また関連して、②野澤秀樹「石川三四郎におけるエリゼ・ルクリュの思想—その受容と差異—」地理学評論79-14, 2006, 837-856頁, ③同上「エリゼ・ルクリュの地理学とアナキズムの思想」空間・社会・地理思想10, 2006, 20-36頁がある。
 - 5) ①野澤秀樹「エリゼ・ルクリュの地理学体系とその思想」地理学評論59A-11, 1996, 635-663頁。なお、ルクリュの初期の著作については、②同上「エリゼ・ルクリュ地理学のための序章—彼の自然観・自然描写について—」(水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』大明堂, 1986), 13-23頁がある。
 - 6) 前掲5) ①640-641頁。
 - 7) 「訳者あとがき」には、原著各頁の上部にある小見出しを参考に本書の小見出しを付したとある。本稿ではそれを便宜的に「項」として扱い、本文中、項名は〈 〉で表記する。
 - 8) ルクリュが、文化伝播の観点からとくに東アジアを注目していたことは、後の『地人論』の以下の記述からもうかがえる。「歴史を、特に東方アジアの歴史を嚴重に研究すると、文明を構成する諸精力の伝播は、恰も人体に於ける生命が中心から外方へと同時に、外方から中心に向って、細胞から細胞へ伝播する如く、人類の大集団を過ぎって、民族から民族へと行われることが、明証されるに相違ない」。前掲4) ①128頁。また、同上240頁には、「1898年、アンヴェルス地学協会に於ける「極東」に関する講演は真に予言者的であったと言われる」とある。
 - 9) 本巻以外でも、クロポトキンは、「自分のシベリヤ研究の全知識を傾倒して」、ルクリュの執筆を助けた。前掲4) ①269頁。
 - 10) 続けて、「一般ヨーロッパ人からは、支那の属国でもあるが如く思われていた六十年前に書かれた本書が、かくも精確に日本の自然と民族とを描写し躍動せしめる技倆には、真に驚かされざるを得なかった」と述べている。前掲4) ①226頁。なお、石川の渡欧期間は1913~20年である。
 - 11) 近代ヨーロッパにおける諸学問の発達の過程で、フランス語・英語・ドイツ語という三大言語による知の「図書館」への出入りが大きな役割を果たしていたことは、水村美苗『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で—』ちくま文庫, 2015, 175-187頁に詳しい。
 - 12) 前掲5) ①641頁。野澤は同じ頁で、「ルクリュの『新世界地理』は読者を飽かすことなく、興味深く読ませる極めて稀な地誌書であるといえよう」と評価している。
 - 13) 評者がこのような見方を得たのは、ナショナルジオグラフィック編『100年前の写真で見る 世界の民族衣装』日経ナショナルジオグラフィック社, 2013, 237頁による。
 - 14) 前掲4) ①74・78頁。
 - 15) 前掲4) ②839頁の引用による。
 - 16) 野澤秀樹「フランス学派と日本地理学—戦前期(1926~1940)におけるわが国地理学への影響—」(京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房, 1982), 223-224・228-229頁。
 - 17) 一例をあげれば、原著注記にある『書経』を『史記』に改めている(592頁)。